

金色の輝きに魅せられた

青銅器の国・出雲へ

十月になると全国各地から神々が出雲大社へ集まってくる。だから出雲の国では、十月を神無月ならぬ、神在月（かみありづき）と呼ぶ。日本一の縁結びの神様として、古くから親しまれ続ける出雲大社だが、出雲の国にはもうひとつ、日本有数の青銅器出土の地としての顔がある。この青銅器を四百十九点も展示するのが『島根県立古代出雲歴史博物館』だ。折しも出雲大社では、約六十年振りの大遷宮が執り行われている。この機会を逃す手はない。いざ、神々の国・出雲へ！

神様のお引っ越し

六十年振りの大遷宮に賑わう出雲大社

出雲大社を訪れたのは梅雨入り前の六月頭、好天のせいか凄い人出だ。腹ごしらえに入った出雲そばの店も大賑わい。いつもこんなに混むものかと訪ねると「普段はそうでもない、大遷宮のおかげですよ」と大忙しである。

大遷宮は、平成二十年四月から平成二十八年三月まで延べ八年間にもわたる大事業だ。平成二十年四月の仮殿遷座祭にはじまり、御本殿、境内、境外の摂社、末社などの御修造が順に進められていく。出雲大社の正式名称は「いずものおやしる」だが、一般には「いずもたいしや」の名で親しまれている。御祭神は、因幡の白兔神話にも登場する大國主大神（おおくにぬしのおおかみ）。俗に言う「だいこくさま」だ。▼



神々しい輝きを放つ古代出雲歴史博物館に展示された銅鐸のレプリカ



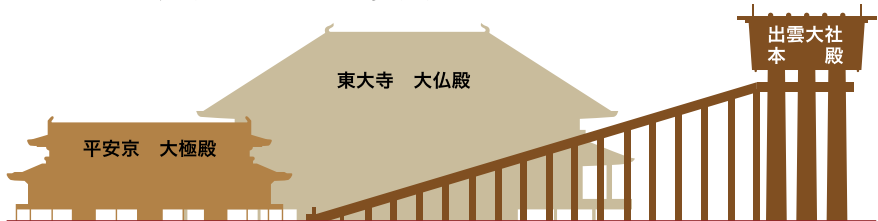
瑞垣越しに見える修復を終えた本殿の大屋根



本殿西の神楽殿にある日本一大きいしめ縄

幻の古代超高層神殿の謎

庶民の神様として愛される出雲大社だが、実は謎も多い。出雲大社の創建については、日本神話などにその伝承が語られている。古事記には、「大國主神は国譲りに応じる条件として「我が住処を、皇孫の住処の様に太く深い柱で、千木が空高くまで届く立派な宮を造っていただければ、そこに隠れておきましょう」と述べ、これに従って出雲の「多芸志（たぎし）の浜」に「天之御舎（あめのみあらか）」を造った」とある。平安時代の本殿は、なんと16丈（約48m）もの超高層神殿だったと伝えられている。また、鎌倉時代に造営されたとされる本殿の柱の根元も発見されたが、その直径は約3mもある。どうやって当時の建築技術で建造できたのか。いやむしろ、なぜこれだけの建築物を必要としたのか。大和民族の歴史には、まだ多くの謎が秘められている。



出雲大社の規模比較

■ 出雲地域で出土した青銅器一覧

出土遺跡など	銅鐸	銅剣	銅矛	銅戈
加茂岩倉遺跡	39			
荒神谷遺跡	6	358	16	
志谷奥遺跡	2	6		
西川津遺跡	2			
平浜八幡宮所蔵		1		
熊野大社所蔵	1			
木幡家所蔵	1			
横田八幡宮所蔵		1		
伝・木次町	1			
真名井遺跡			3*	1
青木遺跡	1			

(*古記録より)



荒神谷遺跡で発掘された358本の銅剣 加茂岩倉遺跡からは39個の銅鐸が出土

境内の広さは、約二万七千㎡もある。本殿西の神楽殿にあるしめ縄は、長さ十三m、周囲九m、重さ五tと日本一大きい。国宝の本殿は、高さ二十四m、白木を用いた日本で一番古い神社建築様式である。本殿は拝観できないが、修復を終えた大屋根の銅板には「ちゃん塗り」と呼ばれる伝統的な塗装が施されている。ちゃん塗りとは、エゴマ油を主成分に松ヤニ、鉛、石灰を混ぜたもので、銅板を保護する塗料だ。「出雲で銅とより良い縁が生まれますように」と二拝四拍手二拝の作法で拝礼。二拝二拍手二拝ではないので訪れた際はご注意ください。本題の「青銅器の国・出雲」について『古代出雲歴史博物館』でお話を伺うとしよう。

武器から祭りの道具に変わることで 広まっていった青銅器

約四〇〇〇年前、古代中国で開花した青銅器文化は、朝鮮半島を経由し、二五〇〇年前に日本へと渡ってくる。銅剣、銅矛、銅戈など武器形の青銅器は、弥生時代の古い時期のものは個人の墓から出土しているのだが、やがて村の内外の墓以外のところから発見されるようになる。これはなぜだろうか。

「銅剣、銅矛、銅戈が九州に伝わってきた当初は、地域の

統治者の権威を誇る武器となったため、統治者が亡くなると、木棺墓や甕棺と呼ばれる土器の棺に副葬品として埋葬されました。それが徐々に祭りの道具へと変わり、村の共有財産として保管されるようになります。こうした青銅器が共同体の祭祀として地中に埋められたため、集落やその周辺から出土するようになるのですが、中には土の中に保管する習慣もあったと思われる。また、外敵から村の危機を守るため、村の境界に埋めたからではないかとも言われています」と足立克己学芸部長。では全国で出土する青銅器の種類が、地域で偏っている訳は？

「青銅器出土の分布を大きく分けると、北部九州は銅剣、銅矛、銅戈、近畿地方は銅鐸が主となっています。北部九州の弥生人は、大陸から武器として入ってきた銅剣、銅矛、銅戈を、最初自分たちで独占していたと考えられます。しかし、その機能が武器から祭りの道具に変わると、自分たちの祭りの中心である銅矛を除き、銅戈を九州各地に、銅剣はより広い範囲で使用を認めていきました。このように、北部九州を経由して次々と大陸の新しい文化や思想が伝わってきますが、それをいち早く吸収し、大きく進歩を遂げたのが山陰、特に出雲地方だったのではと考えています」。

「鳴らす・聴く銅鐸」から 大型で装飾性に富んだ「観る銅鐸へ」

「祭りの道具として使われるようになった青銅器は、弥生時代中期後半から次第に大型化していきます。大陸ではそんな大きな物は作られていないので、輸入された青銅器を国内で鑄直して製造したのではないかと推察しています。私は、瀬戸内海から山陰にかけても、地域ごとに自分たちの好みに合わせた青銅器を自分たちで作っていた可能性が高いと見ています。それを裏付けるものとしては、岡山市や尼崎市の遺跡から銅剣の鑄型が出土していること。また、出雲地域の荒神谷遺跡では、出雲型銅剣と呼ばれるすべて同じ

型の銅剣が、一度に三五八本も発掘されているのです」。大陸文化を吸収していった出雲は、進んだ鑄造技術も導入し、青銅器を大量生産していたのか。雲南市の加茂岩倉遺跡では、大小二種類計三十九個の銅鐸が出土している。

「加茂岩倉遺跡で発掘された小型の銅鐸の中には、兄弟銅鐸と呼ばれる一つの鑄型で鑄造した同じ形の銅鐸が複数セット含まれています。また、大型の銅鐸では、近畿地方で作られた流水文銅鐸や、お坊さんの袈裟のような模様が入った袈裟文銅鐸も出土しています。こうした様々な銅鐸が含まれているのは、こういう祭りを行うにはこんな銅鐸を使用するという定まった祭りの形態があり、それに合った形の銅鐸を入手したいという欲求があったからではないかと考えています」。

出雲は、神の国であり、青銅器の国でもあった筈だ。「銅は、当時の金属の中でも特別な存在だったと思います。その輝きに人々は霊力を感じ、祭祀の道具とした。金色に輝く銅鐸を掲げ、打ち鳴らしながら、武器形の銅製品を持つて舞い踊る、そんなイメージだったのでしょね」。そう言えば、この博物館には、銅鐸を吊るして鳴らす体験コーナーもある。

「銅鐸を吊るして鳴らせるのは、四十から五十㎝までのサイズです。この吊るせる銅鐸には、内面の裾のところに内面突帯という音を出すための隆起が一本めぐっています。ところが、加茂岩倉では二本もある銅鐸も出土しています。つまり内面突帯が模様化してしまっている訳です。銅鐸は祭りの道具として大型化していく中で、鳴らすものではなく、聴く銅鐸から観る銅鐸へと変化していったことが伺えますね」。

ここには、出雲で発掘された多種多様な銅鐸とともに、金色のレプリカも展示されている。その輝きは、当時の人々にとって神の光そのものだったのかもしれない。



島根県立古代出雲歴史博物館 学芸部長 足立 克己氏